

Vol.39 「脚気について」



心と体にアドバイス

健康
よもやま話



公益財団法人中国労働衛生協会
理事長
宮田 明

1974年岡山大学医学部卒。医学博士。公立学校共済組合中国中央病院血液内科部長・副院長、尾道市立市民病院院長などを経て2015年より現職。日本血液学会専門医指導医、日本禁煙学会認定専門医など。現在は健康診断、保健指導・健康教育、社会貢献事業などを行う公益財団法人の理事長。座右の銘は「待てば海路の日和あり」「降りやまない雨はない」。

「原因不明の病氣」だった
先日、福山城博物館で「青年宰相 阿部正方」という企画展示があり、見学した。福山藩第九代藩主の阿部正方は英明で将来を嘱望されていたが、二〇歳で脚気により亡くなった。徳川第一四代將軍の家茂も、二一歳で脚気により亡くなっている。

「江戸煩い」と呼ばれていた。
米食偏重、副食軽視の風潮はその後地方へ広がり、全国的に患者が激増した。明治時代になっても西洋医学には脚気の原因がなかったこともあり、「原因は伝染病」とする説が主流になって病因は不明のままであった。

日本の疫学研究のはりりとして高く評価され、その名は南極大陸の「高木岬」としても残されている。しかしその後、高木の説は賛同を得られず、兵食の改善も遅々として進まなかった。
戦後、患者は激減
脚気の「ビタミンB1欠乏説」が確定するには1932年まで待たねばならなかった。それ以前、米ぬかに脚気を予防する成分が含まれることから1911年、陸軍軍医の都築甚之助が抗脚気成分として「アンチペリベリン」を抽出。治療薬として販売し、多くの患者を救った。

また鈴木梅太郎は、ぬかから有効成分の「オリザニン」を抽出、東京帝大の島蘭順次郎により治療に用いられた。1912年、フンクにより「ビタミン欠乏症」という新しい概念が提唱され、わが国でも島蘭らにより脚気の原因はビタミンB1欠乏であることがほぼ確定された。そして1927年、上記薬剤中のビタミンBがB1とB2の複合物であることが判明し、ビタミンB1欠乏の同定につながった。

しかし、廉価なビタミンB1製剤の作成には時間を要し、ニンニクとビタミンB1が反応してできた有効性の高い「アリチアミン」の発見（1950年）と、その製剤化（アリナミン、1954年）を待たねばならなかった。その後脚気は食事の洋風化で激減したが、1975年ごろからインスタント食品や菓子類などの糖質の偏食と、激しい運動のため脚気患者をまれに見かけるようになった。また、高カロリー輸液には当初ビタミンB1が入っていなかったため、欠乏患者が頻発した。現在は高カロリー輸液には必ずビタミンB1を入れることが定められている。

定期健康診断・生活習慣病予防健診・人間ドック・特定健康診査・各種がん検診
地域初 **フレイル予防ドック** 始めました! あなたの会社の **健康経営** サポートします!

公益財団法人
中国労働衛生協会
福山市引野町5-14-2
☎084-941-8211
<https://churou-wp.sub.jp>

定年退職後の健康管理はどうしたらいいの?とお悩みの方
●健康診断のご案内 ●健康情報の発信 ●健康イベントのご案内
入会費無料 『げんきサポートクラブ』におまかせください!